

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	22221010	研究期間	平成22年度～平成26年度
研究課題名	東南アジア熱帯域におけるプランテーション型バイオマス社会の総合的研究	研究代表者 (所属・職) (平成27年3月現在)	石川 登 (京都大学・東南アジア研究所・教授)

【平成25年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
	A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A- 当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、アブラヤシのプランテーション開発が急速に進行している島嶼部東南アジアの「高度バイオマス社会」の持続可能モデルを、分野横断的な共同研究で提示しようとする意欲的なものであり、研究は若手研究者を中心に順調に進んでいる。

混合ランドスケープにみられる生物多様性の空間構造や物質循環システムの変容の研究、さらには伝統的生業活動がプランテーション経済へと包摂される過程で見られる生業多様化についてはすでに幾つかの成果を上げている。

今後、混合ランドスケープの維持や在地農民のアグロ・エコロジー・モデルの構築と資源バイオマスをめぐる新・国際分業との関係の研究が進展すれば、新たな視点が得られることが期待される。

【平成27年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	異なる分野の研究者の共同により、多角的な視点から、森林消失や農薬使用による水質変化と生物多様性への影響、焼畑農耕や採取狩猟経済の脆弱化、都市と内陸部の世帯紐帯の拡大、アブラヤシ小農生産の拡大、内陸部と市場を結ぶ流通網の拡大等を解明した。また、これらの知見に基づき、環境的持続性の高いモザイク的混合景観モデルを提示するに至っている。
	今後、研究成果を基に、フードシステム論や商品連鎖論と接合させた国際分業論・文明生態論を構築することが期待される。